

→ 国際交流員パトリック・ルムラーの

ドイツを語るパトリック

Vol.7

アルコール



「ドイツ人は水代わりにビールを飲むでしょう」と日本でよく聞かれる。確かにビールをお昼から飲む人をドイツの町中でよく見かける。パチンコやカラオケやゲームセンターなどのような娯楽がないドイツでは、町中のカフェやビアガーデンに座り、ビールを飲みながら休むことが人気の娯楽の一つであるに違いない。隣のテーブルの人がビールを注文すると、お昼にも関わらず、自分もついついビールを注文したくなる人もいます。メニューを見ると量に換算して、一番安い飲み物はビールということに驚く外国人が少なくはないだろう。ドイツでは、一人当たりの年間アルコール消費量をアルコール飲料毎に分類すると、ビールは112リットル、ワインは23.8リットル、ウイスキーなどのアルコール度数の高い飲料は5.8リットルということが分かる。他国と比較すると、ドイツの1年間のアルコール消費量は多いということが分かり、ドイツは毎年トップ5に入っている。

上記の数字を見て、「思ったとおりドイツ人は水代わりにビールを飲む」と思ってしまう日本人もいるだろう。だが、飲まれているアルコールの半分以上は、人口の10%が飲むと考えられている。そのため、アルコール依存症を患う患者が全国に250万人いる。つまり、人口の3%ぐらい。さらに250万人は、依存症になる寸前であると思われる。ドイツでは、アルコールがお祭りとお祝いのときだけでなく日常的に飲まれ、強制的に、いわゆる「アルハラ」で、会社よりも仲間集団圧力が高い若者の間で、社会に親しまれている依存性の高いドラッグであるアルコールを飲ませるケースが多くなってきた。16歳からビールとワインを購入することができるので、若者のアルコール消費が社会問題になってきている。

タバコの取り締まりが年々厳しくなるのに対して、年間に4万人を犠牲にするアルコールは、相変わらず若い人でも簡単に手に入れられるし、どこで飲んでもよく、ある程度飲んで運転しても違反にならない。タバコの宣伝はほとんど禁止になったが、ビール会社の宣伝はサッカー選手のジャージーにまで輝き、ドイツのサッカー代表でさえ、ビール会社と契約を結んでいる。誰もおかしいと思わないことがおかしいと思ってもいいだろうし、スポーツと全く関係ないドラッグには、「サッカーを見るときビールを飲もう」などのようなイメージがあり、そのイメージがドイツの社会に強く根を下ろしてきた。

11月にベルリンで7歳の男の子が市内の砂場で、年上の子どもからお酒をもらい、飲んで、意識不明になった事件があった。子どもはアルコール中毒で病院に運ばれ、一晩中ICUで過ごした。命は助かったが、責任感のない16歳の子どもが簡単にアルコールを購入することができる限り、同じような事件が再び発生するに違いない。ちなみに、年齢の確認をせずに、若者にアルコールを販売するスーパーや24時間営業しているガソリン・スタンドなどがたくさんある。

海外で「ドイツ人はビールを水代わりに飲む」と思われることは、決して自慢するようなことではなく、ドイツの社会は依存性の高いドラッグであるアルコールについて見直すべきではないだろうか。

国際交流員 パトリックさんの

「波・トリック」

第7回

絵の具などで好きなデザインを卵に描き、ドイツの伝統的なイースター・デコレーションを作りましょう。子どもはもちろん、大人も大歓迎！

ドイツの復活祭の卵デコレーション教室が
梅まつりに登場

- 講師 パトリック・ルムラー
- 日時 3月7日(日)
午前10時～午後1時30分 雨天中止
- 会場 史跡下野薬師寺跡ふるさと歴史の広場
- 参加費 無料(1人卵3個まで)
- 申し込み 不要



問い合わせ先

生活安全課 ☎40-5555 mail:seikatsu@city.shimotsuke.lg.jp
※梅まつりに関する問い合わせ 文化課 ☎52-1120